

2002年10月27日

隣人の家を欲してはならない

【聖書】 出エジプト記20章17節

隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛、ろばなど隣人のものを一切欲してはならない。」

申命記5章21節

あなたの隣人の妻を欲してはならない。隣人の家、畑、男女の奴隷、牛、ろばなど、隣人のものを一切欲しがってはならない。」

[序] 幼児の成長

7月21日から十戒を学んで参りました。今日はいよいよ十戒の最後の戒め、「隣人の家を欲してはならない」です。「欲してはならない」よりは、新改訳の「欲しがってはならない」の方が日本語としては良いと思います。それが口語訳では「あなたは隣人の家をむさぼってはならない」となっていました。これは英語の欽定訳(King James Version)「Thou shalt not covet thy neighbor's house」からきているのでしょう。”Covet”は辞書に「他人のものをむやみに欲しがる・切望する」とあります。まさに人の家にあるものを欲しがる、しかもむやみに欲しがって取り上げようとするのが戒められています。

では隣の家にあるものの何がどうしても欲しいと思うのか。奴隷や家畜よりも何より先に隣人の妻が欲しいとは、困ったものです。申命記5章の方の十戒では、最初の出だしが「貴方の隣人の妻を欲してはならない」となって最後に「隣人のものを一切欲しがってはならない」となっています。男というものは自分の妻だけでなく、よく見かける隣の奥さんまで「いいなー、欲しいなー」と羨ましくなって、横取りしたくなる欲望を抱えている。絶対に注意せよと、神さまから見られているのです。私たち男はよくよく自戒しなければなりません。と同時に奥さんたちも、そう見られる自分の魅力を自覚して、自戒しなければならないと思います。

一番下の孫の愛衣が、10月18日に2才の誕生日を迎えました。この8月に3週間シンガポールに来てくれました。去年の8月に来た時はまだ9ヶ月。やっと伝え歩きが出来るようになったばかりで、ただボーっとしていました。ところが今年は1年9ヶ月、5才の兄が彼女の手にある物を取りあげようとしますと、しっかり握って、言葉でも断固として拒否するようになっていました。もうすぐに、人が持っている物が欲しくなって、取り上げようとし始めることでしょう。そして相手が嫌だと言えば、力づくで奪おうとするでしょう。

自分の持っている物を気前よく人に渡せる段階が過ぎて、嫌だと握り締めるのは、所有意識がはっきりしてきた証拠です。この所有意識が更に所有欲へとふくらんできて、自分が持っても他人の持っている良い物がなお欲しくなる。こうして少しでも良い物を多く手許に集めようとし始めます。そしてこれが私たちの自我の自然な成長の姿だと言われています。

私たち人間は、他人の持ち物を欲しがる欲求を強く抱くようになりながら、大人になっていくのでしょうか。だとしますと私たちは、他人の物をむやみに欲しがり、よほど自制していない

とそれを取り上げてしまう罪を犯してしまうと言いたいと思います。

[1]欲張るな

日本は経済の低迷からどうやって脱出するかが緊急の課題です。ところが雪印食品・日本ハム・三井物産・東京電力など、日本を代表する企業で不祥事が頻発して、企業への不信感が増し、これが経済の低迷に追い打ちをかけています。そこで企業における倫理観の確立について、京セラ名誉会長の稲盛和夫さんが23日の朝日新聞に一文を寄せていました。読まれた方も居られるでしょうが、中学生でも分かるようなとても良い文でしたので、ここでその一部分をご紹介します。

「—— 経営者の資質として〈才覚〉が重んじられてきた。才能にあふれ、顕著な功績をあげた者が、社長など経営トップに任命され、企業や社会で高く遇されてきている。しかし私は、昨今の不祥事を見るにつけ、それだけで評価してはならないと思う。〈才子、才に溺れる〉といわれるように、才能をもって成功を収めた経営者が、自分の力を過信して失敗してしまうケースがあまりに多いからだ。

優れた才覚の持ち主であればあるほど、その力をコントロールするものが必要となる。それがいわゆる〈人格〉というものであり、その人格を高めるためには、哲学や宗教などを通じて〈人間としての正しい生き方〉を繰り返し学ばなければならない。

われわれはすでに、子どもの頃に、親や教師から〈欲張るな〉〈だましてはいけない〉〈嘘を言うな〉〈正直であれ〉というような、最も基本的な規範を教えられている。そのなかに〈人間としての正しい生き方〉は、すでに示されているのではないだろうか。まずはそのような単純な教えの意味を改めて考え直し、それを徹底して守り通すことだ。

大企業の社長たちに、このようなことを問えば、〈一流大学を卒業し、トップにまで上りつめた自分に失礼だ〉と一蹴されるかもしれない。しかし実際にはそのような大企業のリーダーが、プリミティブな教えを守ることができなかった、あるいは社員に守らせることができなかったから、企業不祥事が続発しているのである。

実際、先に挙げた企業では、業績に影響を与える事象が生じたときに〈欲張り〉、企業の利益を優先した。その事実が発覚しそうなときに〈嘘を言い〉〈人をだまし〉、事実の隠蔽に走ったのではないだろうか。

一方、私事になるが、バブルの真っ盛りするとき、京セラには営々と蓄積してきた多額の現預金があったために、高騰していた不動産などへの投資を銀行等から勧められた。しかし私は〈欲張ってはならない〉というプリミティブな教えに従い、不動産への投資は全く行なわなかった。当時はそんなかたくなな姿勢をアナリストたちから批判されたが、結果としてバブル崩壊の影響を受けず、京セラは成長を続けることができた。

—— 私は人間としての基本的な倫理観を確立し、それを守り通そうとするきまじめな

社会をつくることこそが、一見迂遠に思えるが、日本を再生するためにわれわれがとるべき、最善の道であると考えている。」

稲盛さんは経営者でありながら仏門に帰依し、出家された本物の仏教者です。このような信仰者の証が日本の経済界で地の塩・世の光の役割を果たしていただきたいと切に願います。

それにしても私たちが教えられてきた「人間としての正しい生き方」についての教えの一番最初に、稲盛さんは「欲張るな」を挙げています。やはり彼は経済人ですね。欲が人間の経済活動の動機だからでしょう。そして世をあげてのバブル景気のときにも、「欲張るな」に徹して不動産投機に手を染めず、経営の舵取りを誤りませんでした。偉いですね。

一方聖書の十戒は、その教えの締めくくりとして「欲しがるな」「むさぼるな」と教えています。でもこれが私たちにとってとても大切だから、一番最後に教えられたのだと言うことも出来ません。私たちは所有欲を膨らませながら大人になってきました。これが知識欲・研究欲・あるいは物心両面にわたってより良いものを持つとする原動力となって、人類の進歩に貢献してきました。

しかし一方では「欲しがる」「むさぼる」でどれだけ多くの者が身を滅ぼしてきたことでしょうか。

日本の企業だけではありません。ですから私たちはこの戒めをかたときも忘れずに我が身に言い聞かせ続けていかなければなりません。

[2]日朝の国交回復

今日本では、北朝鮮に拉致されて生き残った5人の24年ぶりの一時帰国で沸き返っています。毎週土曜日のラジオ放送をずーっと続けている放送タレントの永六輔さんが「向こうが拉致を認めたとき、小泉さんも〈むかし日本も申し訳ないことをしました〉と謝るべきだった」とラジオで言ったために、けしからんと反響が殺到して大変だと、新聞に出ていました。これもまた冷静さを欠いたおかしい反応ですね。

朝鮮半島は、日本による植民地支配を受け、戦後は38度線を境に分断されました。南北の対立は、どちらが優位に立って主導権を握るかで朝鮮戦争まで惹き起こして、熾烈をきわめました。動乱後も強力な軍事政権のもとで、さまざまな妨害・かく乱工作が入り混じり南北の戦いは続きました。その時に北朝鮮によるスパイ・拉致事件が日本でも行なわれたのです。

しかしこの戦いは、結局日本と国交を回復し、経済復興に成功してソウルオリンピックまで開催した南の韓国の方に軍配が上がりました。ソ連・中国の援助を十分に受けられなかった北朝鮮は、孤立のなかで疲弊し、政策の転換を余儀なくされたようです。そして9月17日、国交正常化に向けての日朝首脳会談が行なわれたのです。これから日本は北朝鮮とどのような関係を結ぶべきなのでしょう。

これについて私たちは、十戒の今日の戒めから考えてみる事が出来ます。朝鮮半島は日本の一番近くにある隣国です。隣人の家に当たります。この隣人の家を日本人はどのように見て、付き合ってきたのでしょうか。昔は朝鮮半島を通して様々な産業技術・学問・芸術等の文化を学びました。その頂点に仏教の伝来があります。優秀な人々が朝鮮から日本に移り住んで、貢献してくれました。今の天皇が自分の血のなかにも、朝鮮の血が入っていると云いましたが、本当にそうです。私も町で「貴方は Korean か」とよく聞かれます。

ところが日本の国力の方が相対的に強くなるに従って、この大切な隣人を見下げる風潮が生まれてきました。そして豊臣秀吉が朝鮮征伐を二度やっています。豊臣に代わって天下を取った徳川時代の終わりに、ペリーの黒艦が下田に現れ開国を迫りました。日本は鎖国政策を捨て、世界に開かれた近代国家の道を歩まざるをえなくなったのです。そしてそれに対応できなかった徳川幕府体制は崩壊し、天皇を戴く明治政府が誕生しました。

この革命期のオピニオン・リーダーの一人吉田松陰でさえも「欧米列強との貿易で日本がこおむる損害を、朝鮮や満州で償うべきだ。朝鮮を日本に服属させることは日本本来のあるべき姿だ」と主張していたそうです(加藤陽子「戦争の日本近現代史」)。明治政府も当然のこととして、日本の独立と繁栄の観点から朝鮮半島のとらえ、その向こうに広がるロシア・中国の勢力に半島が支配されては日本の安全にとってこの上なく危険だと考えました。そして日本にとって少しでも有利な状況を朝鮮半島につくり出そうとした結果、最後には植民地支配をしてしまったのでした。

子どもの争いはお菓子や玩具の奪い合いですが、国のレベルになると自分の国の安全とか利益とか、より強大になるために、隣国の富や領土や主権をむさぼろうとします。国の力が違いすぎると弱い方がいつも搾取されますから、無理をしても軍備を強くして力の均衡を保とうとします。インドとパキスタンの紛争をみても、貧しい民衆を大勢抱えながら、両方で莫大なお金を浪費して核兵器を開発しミサイルの発射実験を競い合い、カシミールの領有権を争っています。本当に愚かな限りです。

日本はこの愚かさを繰り返してはなりません。どうしたら穏やかで安心できる隣人関係をつくれるでしょうか。私たちはこの一番身近な隣人の家を見下げて、日本の安全と利益のために使うとことだけ考えて、取り扱ってきました。自分の犠牲を払ってでも助けなければならない大事な隣人とはして来なかったのです。だから朝鮮半島の人々の間に、日本が自分たちを見下げ、日本の利益の対象として自分たちを扱い、またぞろ支配しようとするのではないかという疑いを根深く抱いている人々が多いのは当然です。

私たちは「あなたは隣人の家をむさぼってはならない」の戒めをやぶり続けて来たのです。先ず謝ることから始めるべきです。ましてや相手が拉致を認めて謝ったのなら、こちらはなおさら心を低くして謝まるのは当然です。その当然を語った永六輔さんに非難が殺到するのは、日本人の倫理観が企業の経営者に限らず、全般的に貧しくなってしまった現れに他なりません。

[3]ダン族の罪

イスラエルの民は、奴隷にされていたエジプトから脱出して、約束の地カナンを目指して民族の大移動をしました。その大移動には 40 年かかりました。その間に裁判制度を整え、十戒を中心とする神の民としての生活のきまり・すなわち律法を持ちました。そして奴隷生活になじんでいた世代の人々が死に、新しい世代が社会の担い手になるのを待って、指導者もモーセからヨシュアに交代して、カナンに移り住みました。

イスラエルの民は、12 部族がそれぞれ住み着く地域を決めました。その地には当然先住民がいたわけで、彼らとどう折り合って自分たちの生活を確立するかが大きな課題です。その経過がヨシュア記・士師記に記されています。ここでダン族が自分たちの土地を勝手にどうやって手に入れたかを士師記 17～18 章で知っておきたいと思います。

彼らはヨシュアから割り当てられた土地に定着できませんでした。そこで 5 人を派遣して良い地を探させました。5 人は 160 キロ北にあるライシュ迄やってきて、その地の民が、シドン人のように静かに、また穏やかに安らかな日々を送っているのを見ました。その地には人をさげすんで権力を握るものはいません。しかもシドン人からも遠く離れ、またどの人間とも交渉を持っていませんでした。土地も非常に良いのです(18:7～9)。

5 人の報告を受けたダン族は、600 人の精鋭部隊で奇襲攻撃してライシュを占領し、そこを自分たちの定住地にしてしまったのでした。どんなに穏やかに暮らしていても、いざといった時に強いリーダーシップがないと、理不尽な攻撃に対抗できない。また周りの町から孤立して自分たちの平安な生活に安住していると、だれも助けてくれないという厳しい現実が語られています。

十戒を授けられた民の一部が、むさぼりの戒めを破って穏やかに平和に暮らしている善良な隣人の家を滅ぼし、自分の物にしてしまった。しかもその大きな罪を他の 11 部族が咎めずに認めてしまった。十戒をお授けになった神さまに対する信仰が崩れると、このような罪を犯してしまうと言う記事です。

それにしてもこれは何ともいえない恐ろしい歴史の現実です。なにしろ私たちは、神を畏れなくなってしまう世界を作ってしまったのですから。だから穏やかで安らかな暮らしを大事にするために、強力な政府と軍備そして近隣諸国との外交努力も必要だということになるのでしょうか。強力な政府・軍備と穏やかで安らかな暮らしと果たして両立するのでしょうか。

ライシュの町について聖書はこう書いています。「その地には人をさげすんで権力を握る者が全くなく」。権力は自分が支配する人間の人格を卑しめ、命を軽くする傾向があることがはっきりと記されています。ではどうしたらよいのでしょうか。

10 月 12 日(土)夜、バリ島で爆弾テロが起こり 180 人以上が殺されました。イスラム過激派 JM の犯行とされています。シンガポールは昨年 12 月に JM 一味を逮捕し、以後更に二回の

手入力で国内の組織は一応壊滅されたと言われています。今年の1月近隣諸国のテロ対策会議がシンガポールで開かれた時、リー・カンユー上級相がインドネシア国内の過激派の危険に言及したら、猛烈な反撥を受けました。ワヒド前大統領は「シンガポールのような警察国家ではないから、容疑が十分ではない人間を簡単に逮捕できない。民主主義国家がどういうものかを、リーに教えてやらなければならない」といったと伝えられています。

しかしその結果が今回の大爆発になったわけで、観光客は減り、経済投資は逃げ、インドネシアはまたまた大きな打撃を受けました。そしてアメリカを先頭にする国際世論の圧力で政府はテロ取り締まりにやっと重い腰を上げました。シンガポールからすれば「それみたことか」と言いたいところですが、でもインドネシアにしてみれば小さな一つの島の都市国家シンガポールと違って、1万以上の島に2億人の人々が暮らしているのです。どうやって取り締まればよいのでしょうか。警察を何倍にも強化することでしょうか。それにもうスハルト時代のように強力な独裁支配に戻ることは出来ません。

だからでしょうか。インドネシアのムスリムは「我々の殆どは温和なムスリムであり、みんな兄弟なんだから、仲良く助け合って暮らしていこう。極少数のおかしな連中がいるけれども、これは世界どこでもそうだろう」と言って首をすくめます。こうしてインドネシアはインドネシア流にのんびり進んで行くより仕方がないのかもしれない。

でも私たちは2000万人はいるといわれるインドネシアのクリスチャンが、今こそ「むさぼるな」の戒めを大きく叫んで、富が公平に行き渡る正義と公平が打ち立てられ、テロリストの育つ温床がなくなっていくように働いてほしいと期待します。ムスリムとクリスチャンが隣人同士として互いの命や持ち物を尊重し合って、仲良く暮らしていく社会を目指してほしいものです。

[結]世界平和の鍵

ある人がこう言っています。「人の持っている物が羨ましいと思う心は、自分が神さまから頂いている沢山の恵みを見えなくする。自分より人の方が良く見える時、自分が好きではなくなってしまう。そして神さまが一人ひとりをととても素敵に造ってくださったことを、忘れさせる」

本当にそうですね。自分が頂いている恵みが見えなくなると、人が羨ましくなるとも言えるでしょう。また神さまが一人ひとりを素敵に造ってくださったことを忘れるから、自分と人を比べて、劣等感や優越感に襲われるのです。

「盗んではならない」の戒めの時に、盗みを働いていた人たちに対するパウロの呼びかけ「困っている人に分け与えるようになるために、労苦して自分の手で働こう」を学びました。これは今日の戒めにも当てはまります。もしも私たちが、仲良く暮らしていく大切な兄弟として受けとめる愛を隣人に対して持つならば、その隣人の家から何かを搾取しようなどとは思わないでしょう。隣人を自分のように愛する愛こそが、私たちをむさぼりの罪に打ち勝たせてくれるのです。

「愛する心を与えて下さい」「その愛をさらに強めてください」と常に祈り求めましょう。

そして「隣人の家を欲してはならない」との戒めに懸命に聞き従っていきましょう。この戒めこそ、世界に平和をもたらしていく大切な鍵だからです。

完